多賀信濃殿

右

のぼり赤く　ひら〳〵地白く
右といふ字をあかく
のぼり赤く　ひら〳〵地あさぎ
右といふ字をくろく
のぼり赤く　ひら〳〵地むらさき
右といふ字をしろく

左

のぼり赤く　ひら〳〵くろく
左といふ字をしろく
のぼり赤く　ひら〳〵黄
左といふ字をくろく
のぼり赤く　ひら〳〵青く
左といふ字をあかく

一、永井傳七郎
二、半田惣兵衛
五、山崎源五左衛門
六、津田宇右衛門
九、土方勘解由
十、玉井藤左衛門
三、津田求馬
四、野村五郎兵衛
七、小寺平左衛門
八、山崎半左衛門
十一、藤田平兵衛
十二、高田源左衛門

朱書。右覺書は辛未年二月十五日、軍器等之内未被仰出無御座品々書上申時分、御馬廻十二組まねきの色書記可上之旨、筑後殿・信濃殿を以被仰出、如斯書付上之。

一三　飛州高山城在番始終之覺

一、元祿五年壬申八月二十二日、御老中戸田山城守忠昌殿御宅に、聞番三好助左衛門御招被仰渡候は、飛驒國高山城主金森出雲守頼出羽國上の山に所替被仰付、則引拂被申候。高山之城明候間、隣國之儀候條、家來在番人可被遣候。大勢不及被差越、一萬石積り人數・弓・鑓・鐵炮可被遣候。爲引渡、御使番淺野伊左衛門彼地に遣候。未何時可被遣茂難知候。其内には伊左衛門に茂可被仰談由御申渡也。此時御在府也。依之御馬廻頭永井傳七郎を改稱織部、弓鐵炮頭横目使番等段々被仰渡。

一、此度新命織部に、与力五人・足輕五人・小者五人御預け、御馬廻組番頭列小將番頭に次ぐ御役料百石、使役列小將横目に次ぐ料銀二十枚。

一、同月廿五日、御目付淺野伊左衛門高山に被遣候付而、今朝參上年寄中に對顔。御前御不豫に付無御對顔。高山に被遣候御家來交名等承度之旨に而、三好助左衛門を以左之紙面被遣候寫也。

飛州高山御城在番人數之覺

馬廻組頭　永井織部　鐵炮頭　中村惣右衛門
弓頭　橋爪縫殿　目付　中村爲兵衛
使番　平田清左衛門　織部組番頭　湯原源七郎
織部組使役　中村藤左衛門

同組之侍二十人

葛卷圖書　横山牛之助　大橋九郎兵衛
篠原左兵衛　湯原長十郎　中川長吉
安見覺左衛門　羽田帶刀　森田小左衛門
西村孫九郎　大嶋六之丞　寺西庄兵衛
後藤次右衛門　鈴木助左衛門　岡田伊右衛門
神田善兵衛　水野孫進　平松友丞
飯尾与八郎　大野主税

外役儀申付候者四人

麻生次郎左衛門　丹羽佐左衛門　中村四兵衛
高田佐左衛門
織部組与力五人　惣右衛門組与力三人
縫殿組与力三人　織部支配徒者四人

此外足輕小頭等は人數未相極不申候。以上。

覺

一、弓二十張
一、鐵炮三十挺
一、長柄三十本

此外弓五張・鐵炮八挺、馬驗永井織部爲持申候。以上。

初度在番

知行二千石、役料二百石、徒者上下五十七人　永井織部
御馬廻組頭　同　四百石、役料百五十石、同二十人　橋爪縫殿
御持弓足輕頭　同　千二百石、同百五十石、同二十九人　中村惣右衛門
御持筒足輕頭　同　千五百石、同百石、同三十五人　湯原源七郎
御馬廻番頭　同　三百石、同百五十石、同十五人